

平成 29 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第42回を迎えた校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生から3年生まで合わせて今回382編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会の教員8名と一般教科の国語担当教員3名（情報メディア教育センター運営委員兼任教員は含まず）の計11名による厳正な審査と投票を経た結果、今回の優秀賞7名の入選を決定しました。

ここに入選者の氏名と読書感想文のタイトルを掲載し、その栄誉を称えます。

最優秀賞

該当作品なし

優秀賞

電子制御工学科1年	本多 涉	私の教科書
電子制御工学科1年	今岡 美杜	一人の日本人として
物質化学工学科1年	吉田 七唯	「コンビニ人間」から学ぶ普通ということ
機械工学科2年	橋口 司	正義とはなにか
物質化学工学科2年	栗原 悠花	人間の滅びの美しさ
物質化学工学科2年	竹本 奈菜	世界から消えたなら
機械工学科3年	末永 共助	人が共に立ち上がるとき

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品18編について佳作としました。以下に、氏名を紹介し、その努力を称えます。

佳作

1 M 大久保 颯真	1 M 福田 優弥	1 M 桂田 和香奈	1 E 岡本 敬宏
1 E 樹下 倭奈乃	1 I 河合 智樹	1 I 谷 双瑠	1 C 小西 鈴菜
1 C 音成 岬			
2 M 板垣 壮流	2 E 上谷 仁亮	2 E 河村 歩実	2 E 中久保 拓海
2 S 新谷 大輝	2 S 松村 竜之介	2 I 上野 達也	2 I 川西 恭平
2 C 大西 夢			

それでは以下、講評です。

まず、個々の入選作品について感想を述べましょう。

3Mの末永さんは江島周『災神』を読んで、「人と人とのつながりの温もり、そして、その大切さを学ぶことができた」と言います。「悲劇の記憶は、関係者以外忘れてしまうものなのかもしれない」けれども、「どこかで苦しみ、闘い、そして乗り越えようとしている人々が、今もいることを」記憶に留めること、それが感想文のタイトルにある「共に立ち上がる」ことだと説きます。骨太で力強い感想文だと思いました。

2Mの橋口さんの作品は、森村誠一『正義の証明』の感想文です。本書に登場する「私刑人」という存在から、「今の時代SNSを使えば、誰でも『私刑人』になれる」と敷衍する視点は、非常にユニークだと思いま

す。また、「個人の正義で行動するのではなく、分別を考えて行動するべきだ」という結びの一文にも共感できます。ただし、「正義とはなにか」というタイトルなので、「正義」についての定義が本文中にあったら更によかったと思いました。

2Cの栗原さんは、太宰治『斜陽』について書いてくれました。登場人物「かず子、かず子の母、直治、上原」の4人は「どれも美しく滅んでいった」と結び、感想文のタイトルである「人間の滅びの美しさ」を読み取っています。いちおう日本近代文学の研究を専門とし、太宰について少々かじった立場から申しても、本作に「滅びの美学」を読み取るのは妥当であろうと思います。なお、同じようなテーマを持った作品として、中編小説『右大臣実朝』を推したいと思います。ティーンエイジャーのみなさんにぜひ読んでいただきたい作品です。

同じく2Cの竹本さんは、川村元気『世界から猫が消えたなら』を読んだ感想として、「私が明日死んでしまうと分かったら、したい事は山ほどあってもなにも出来ない気がする」けれども、仲間や家族などの「大切な人とすごしたい」と書いています。「明日世界が終わるとしたら何がしたいか」という究極の質問に対する答えを考え続けるのは、とても大切なことだと思います。なぜなら、今の自分にとって何が一番大切なのかが見えてくるからです。

1S今岡さんの作品は、藤原正彦『国家の品格』の感想文です。奇しくも昨年末、相撲界の騒動で「品格」という言葉が話題になりましたね。著者の主張をきちんと読み取り、それに対する自分の意見を堂々と述べているところに好感が持てます。また、「国家の品格を担う立派な日本人として立っていたい」という結びにも強い気概を感じました。ただし、著者の主張なのか今岡さんの意見なのか少々わかりにくい箇所がありますので、その点に気をつければもっとすぐれたものになったのではないかと思います。

1S本多さんは、塚本勝巳『うなぎ 一億年の謎を追う』を読みました。「世界のうなぎ博士」と呼ばれる著者の著作から「うなぎ調査にかける姿勢や思い」と『自分が好きなことを力いっぱいやり続ける』ことの大切さを読み取り、「この本をこれからの私の教科書として大切に」と結びます。感想文を読んだ私も、情熱を持って取り組み続けることの大切さについて改めて考えさせられました。

1C吉田さんの作品は、村田沙耶香『コンビニ人間』の感想文です。おとし芥川賞を受賞した際、作者が実際にコンビニでアルバイトを続けていることで話題になりましたね。タイトルの通り、吉田さんは本書を読んで「普通ということ」について考察し、「普通とは一人一人の豊かな感性、すなわち個性をつぶす一つの道具にもなりかねない」と「普通」の危険性に警鐘を鳴らします。文章を書き慣れているようですし、次年度の応募作にも期待したいと思います。

つづいて、全体の印象を述べたいと思います。審査の最終段階に残った作品の中に、川村元気『世界から猫が消えたなら』(2012)と、住野よる『君の隣臓を食べたい』(2015)を扱ったものが2つずつありました。それぞれ最近映画化されたものですので(前者は昨年、後者は一昨年)、映画を観たことで原作に目を通そうと思ったのではないかと推察します。個人的な話で恐縮ですが、私も映画を観てから原作を読んでみるのが少なくないので、みなさんに共感する次第です。ただし、夏目漱石や芥川龍之介、志賀直哉など、有名どころの作品を扱ったものが入選作の中にほとんどなかったのは、少し残念でした。なお、読書感想文の提出が義務ではない3年生から3編の力作が寄せられたこと、教科担当として非常に嬉しく思っています。今後、3年生以上のみなさんからも応募が増えることを期待します。

最後に、国語教員の立場から敢えて苦言を。入選作においても、原稿用紙の使い方に間違いがかなりありました。また、誤字や乱筆も少なくありません。そして、主述の不一致、係り受けや「てにをは」の誤りなども散見されました。今回は残念ながら最優秀賞の該当作がありませんでしたが、それらの点も関係していると思います。文章の構成を考えてから書き始め、推敲し、清書してから提出するよう心がけましょう。

(国語担当：千葉 幸一郎)

